

縄文時代後期～晩期の生業と交流

—上北浦遺跡の調査成果から—



会期：令和6年5月7日（火）～10月31日（木）

会場：熊谷市立江南文化財センター

熊谷市北部の江波地区に所在する上北浦遺跡の発掘調査で得られた出土遺物から、縄文時代後期～晩期の人びとの**生業**（くらしを立てるための仕事）と**交流**（他の地域との人や物の行き来）について探ります。＊後期から晩期に移り変わるのは今から約3千年前ごろ

1 上北浦遺跡の概要

○立地と環境（第5図）

上北浦遺跡は、水田が広がる妻沼低地の中にあり、利根川支流の福川がつくりだした自然堤防の上に立地します。現在の利根川までは、1.5 kmの近さで、縄文時代から利根川の影響を受けていたと考えられます。

発掘調査は、工場の施設建設に先立ち令和3年4月から6月にかけて実施され、縄文時代後期後葉から晩期にわたる集落跡の一部として竪穴建物跡8軒、土坑9基が検出されました。

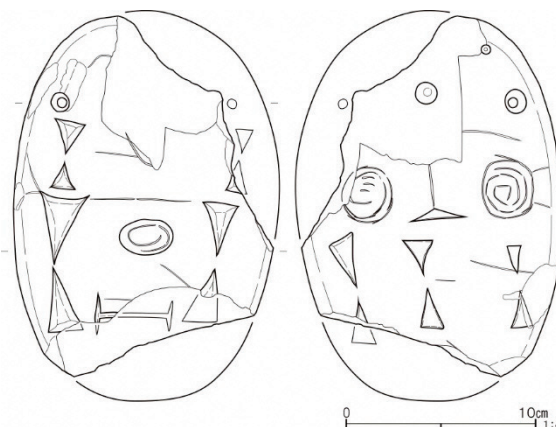
○岩版の出土（第1図）

発掘調査直後から岩版の出土が注目されました。全体の3分の1を欠損していますが、長さ19 cm（復元長20 cm）、幅14 cm、厚さ3 cmの大きさです。中世の堀の底から出土しましたが、縄文時代晩期のものと考えられます。

軟質の泥岩に穴や文様を彫り込んでいます。第1図の左図を正面、右図を背面と捉えていますが、両面に施された向かい合う二等辺三角形のような文様（三叉文）を中心にして、^{さんさもん}両面を貫通する一対の小さな穴、さらに裏面の一対の渦巻き文が特徴です。

岩版は、東北地方や北関東地方で出土例が多い呪術的な遺物ですが、その出土地点は、埼玉県内では大宮台地を南下するようにして、台地南端の川口市石神貝塚遺跡にまで及んでいます（第6図）。

上北浦遺跡のものは、埼玉県内では最大級ですが、これと同じか、それ以上の大きさのものは、群馬県伊勢崎市北米岡遺跡や栃木県足利市あがた駅南遺跡など、利根川や渡良瀬川の沿岸地域で出土しているので、上北浦遺跡もこの地域に所属することで大型の岩版を所有し、同様の岩版を用いた祭祀を行っていたと考えることができます。



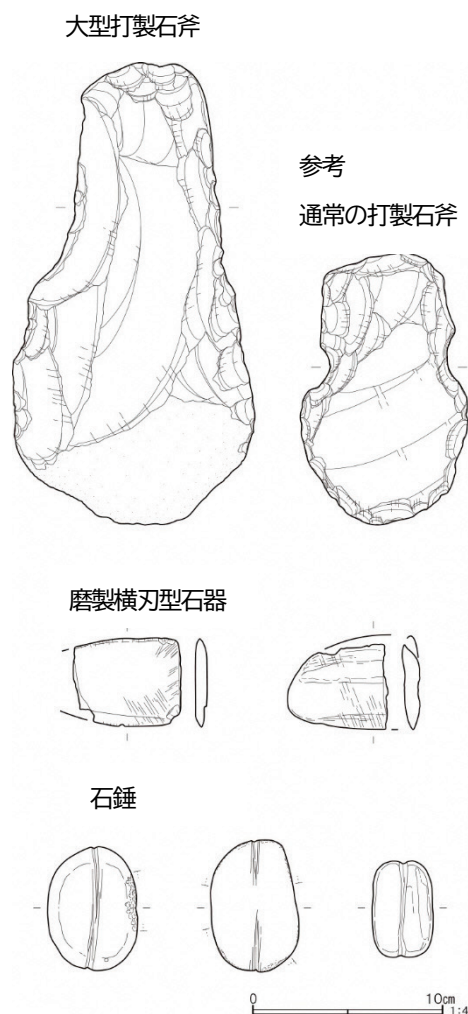
第1図 岩版

2 生業と交流

◎食料を得る（第2図）

○大型打製石斧

長さ 18 cmを超える大型の打製石斧が5点出土し、そのうち4点が第8号竪穴建物跡に集中します。最大のものは長さ約 24 cm、重さ約 1.5 kgありますが、並べて図示した通常の打製石斧の長さ 1.7 倍、重さ5倍の大きさです。大抵、大型の打製石斧が出土することは少なく、それが複数集中することもあります。土を深く大きく掘り込むことを目的に作られたと考えられますが、土中の食料を採集したり、広い範囲を掘り返すために使ったのかもしれません。



第2図 石器・石製品

○磨製横刃型石器

薄い板状の砂岩を磨き、長辺に刃をつけた磨製石器が、2点出土しましたが、この形状の石器は、他ではあまり見られません。刃の部分に擦痕が見られ、穂になった植物の実を摘み取るのに使った可能性があります。

○石錘

魚を獲る網の重りに使われた石錘が、30点以上出土しました。集落のすぐ南側には福川が流れ、利根川も現在よりもっと上北浦遺跡の近くを流れていたと考えられるので、魚獲りは上北浦遺跡の人たちの生業の中心でした。

○獣骨

焼けた獣骨の破片が、600点以上出土しました。分析の結果、シカ（ニホンジカ）とイノシシの骨で、シカの方が多く、部位として最も多いのが角です。上北浦遺跡の人々が、シカやイノシシを狩猟の獲物としていたことがわかります。

焼けた骨は、肉を焼いたときのものではなく、ある目的を持って意図的に骨を焼いているようです。同様の例は、深谷市原ヶ谷戸遺跡など、同じ時期の遺跡でもしばしば見られるため、これを狩猟儀礼の一部とする説もあります。

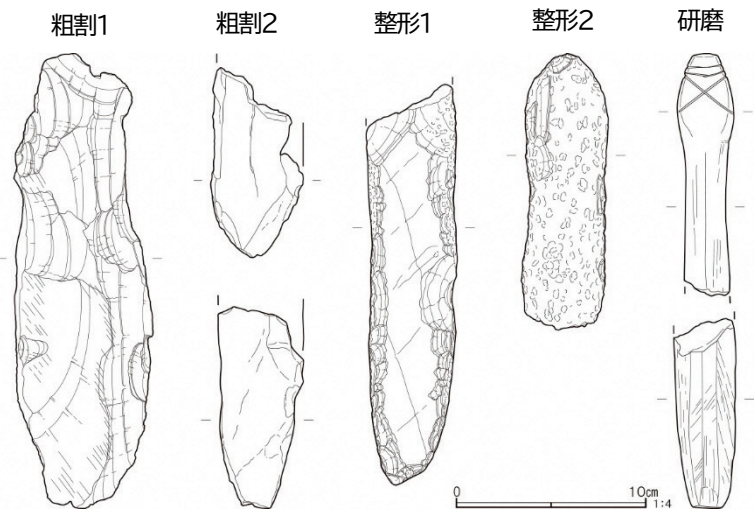
なお、鹿角を利用した装飾具の破片が数点出土しました。

この他に、鳥獣を獲るための打製石鏃が約50点出土しました。縄文時代は、狩猟採集の時代と言われますが、これを裏付ける遺物が多数出土しました。中でも大型打製石斧や磨製横刃型石器は、縄文時代後期までの遺跡では類例があまり見られないので、食料の採集方法や採集対象に変化が生まれたののかもしれません。

◎作る

○石剣の製作（第3図）

荒川で採取される緑泥石片岩を材料にして、石剣を製作した痕跡を検出しました。石剣は縄文時代後期～晩期の遺跡から多く出土しますが、製作遺跡は少なく、福川最上流部に位置する深谷市原ヶ谷戸遺跡に次ぐ例になります。原ヶ谷戸遺跡とともに上北浦遺跡で作られた石剣が他の遺跡に運ばれた可能性が大きいです。



第3図 石剣の製作工程

検出した遺物の状態から、次の5段階の工程を想定しました。

粗割1 太さや長さを意識して不要部を打ち欠き、大まかな棒を作り出します。

粗割2 節理によって薄く割れた破片ですが、尖った先端が認められます。

整形1 側面の直線を作り出すため、細かな打撃を加えます。

整形2 表面を整えるために、細かな敲打を加えます。

研磨 表面を砥石で研磨し、沈線で文様を施して完成させます。

○赤色顔料の精製

赤色顔料が付着した、手のひらサイズの円礫（^{すりいし}磨石）20点以上と、板石（石皿）1点、さらに赤色顔料の小さな塊も出土しました。上北浦遺跡では、赤色の鉱物を粉砕して赤色顔料を精製していたようですが、赤色顔料が付着した磨石の数の多さは、他の遺跡と比べても注目すべきものです。

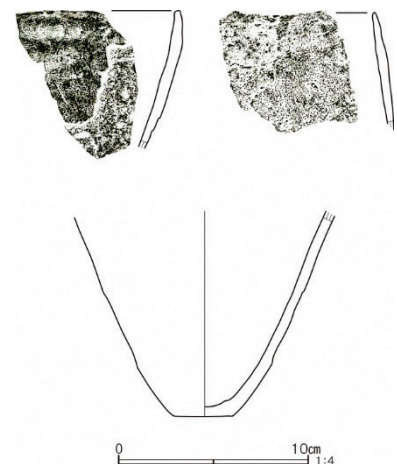
赤色顔料は、縄文時代の土器や耳飾り、木製品などに塗られていることがありますが、上北浦遺跡の出土遺物では、耳飾り9点で認められる程度です。

◎持ち込む

○製塩土器（第4図）

粗製で薄く、胎土に砂を多く含み、火を受けて表面が荒れるという特徴を持つ、塩作りに使われたと考えられる製塩土器の破片が多数出土しました。埼玉県や栃木県などの内陸部の縄文時代後期～晩期の遺跡では多く出土しますが、茨城県霞ヶ浦もしくは東京湾沿岸部で作られた塩とともに持ち込まれたものと考えられます。

塩は生活に不可欠であり、人や物の交流を顕著に示す遺物です。



第4図 製塩土器

○石材

小さな石の中にも、他の地域から持ち込まれたと見られるものが存在します。

黒曜石は長野県から、メノウは茨城県久慈から、赤玉石と呼ばれる赤色の石や緑色の緑色変質岩は新潟県佐渡から、赤色の斑をもつ変質岩は群馬県の火山地域からそれぞれ持ち込まれた可能性があります。これらは、石器や顔料の材料として使われたと考えられます。

3 上北浦遺跡の特性

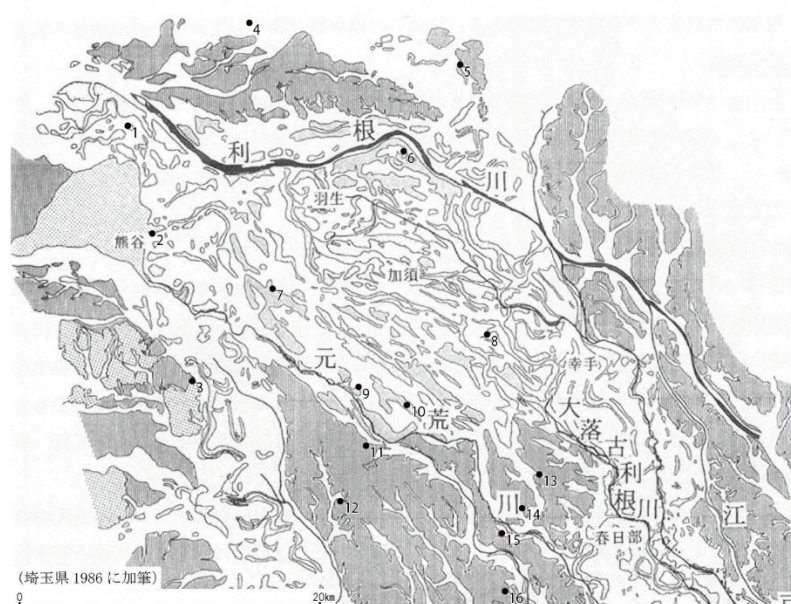
上北浦遺跡の出土遺物の分析から、次の3つの特性が明らかになりました。

- ①縄文時代後期～晩期を通じ、特に晩期になって成長した妻沼低地における拠点的な集落の一つである（第5図 15）。
- ②大型の岩版の存在、獣骨を焼く行為、その他の土器や耳飾りの特徴等から、北関東との共通点が高い。
- ③モノの搬入・生産・供給に関わる集落である。

上北浦遺跡の調査によって、妻沼低地における縄文時代後期～晩期の生業や交流を知る多くの資料を得ることができました。



第5図 妻沼低地の縄文時代後期～晩期の遺跡



岩版集成表

遺跡名	長さcm	幅cm	備考
1 上北浦	19+	14	他に小片5点
2 諏訪木	11	8.9	他に1点 系統が異なる
千網谷戸	10+	17.2	
石之塔	12.5+	17.3	他に6点
4 あがた駅南	20	15	他に4点
5 藤岡神社	9.7	9.4	他に1点
北米岡	26.2	16.6	
6 長竹	9+	11+	他に8点
7 赤城	8.3+	6.2+	
8 道合	16+	14.4	
10 小林八束1	12+	12.3+	他に1点
11 後谷	12.5+	14.4+	他に1点
12 高井東	12.5+	12	土版として報告
15 久台	6.4+	8.7	他に小片1点
16 小深作			報告書に文章記述のみ
宮合貝塚	5.6+	5.6+	破片転用石製品
石神貝塚	6.0+	5.3+	

※最大個体の大きさで、欠損の場合+を付した

1 上北浦(熊谷)	9 地獄田(久喜)	千網谷戸(桐生)
2 諏訪木(熊谷)	10 小林八束1(久喜)	石之塔(太田)
3 中磨(熊谷)	11 後谷(桶川)	北米岡(伊勢崎)
4 あがた駅南(足利)	12 高井東(桶川)	宮合貝塚(川口)
5 藤岡神社(栃木)	13 清左衛門(白岡)	石神貝塚(川口)
6 長竹(加須)	14 雅楽谷(蓮田)	
7 赤城(鴻巣)	15 久台(蓮田)	
8 道合(久喜)	16 小深作(さいたま)	

第6図 館林・大宮台地の縄文時代後期～晩期の主な遺跡